

駒井洋 [監修]、首藤もと子 [編] 『東南・南アジアのディアスポラ (叢書グローバル・ディアスポラ 2)』
(東京：明石書店、2010年、288頁、本体5,000円+税、ISBN 978-4-7503-3322-9)

(評) 工藤 正子*

本書は、「叢書グローバル・ディアスポラ」第2巻として刊行され、越境者たちの転地(displacement)をめぐる状況とそれへの応答が、東南・東アジア出身者を対象とする実証的な調査研究から明らかにされている。12の章におさめられた事例の数々は、近年の研究においてその意味が拡散しているといわれる「ディアスポラ」[ブルーベイカー 2009]の概念をめぐる、いかなる洞察をもたらすのだろうか。人口が流出するメカニズムやそれが本国の社会経済に与える影響、移動を加速する幹旋ビジネスの興隆と人的ネットワークの拡大など、本書は多くの興味深い論点を提示しているが、紙幅の制約から本稿では本書の特色について4点に焦点をあてて論じたい。

第一点として、本書では、ディアスポラの社会空間の編成が、越境者の政治的立場や法的地位、ジェンダー、エスニシティ、宗教などの属性とその交差によって、複雑かつ多面的に規定されることが明らかにされている。たとえば、オーストラリア・キャンベラ市ではインドシナ難民のラオス系がホスト国政府の多文化主義政策に適應することで仏教徒としての居場所を交渉していくのに対して、新移住者のタイ系は、仏教寺院設立の過程でラオス系と協働するものの、やがて本国の宗教的伝統の正統性を強調した排他性をみせるようになる。この興味深い分岐の背景要因として、タイ系には一時滞在のエリートが多く、かつ経済発展をとげている本国との連携がもつ意味が大きいのに対し、故国が社会主義的改変をへたラオス系難民にとって故国との関係は大きく異なることが示される。伝統が選択的に維持、または再発見される過程が、その主体である越境者の属性といかに相関し、転変する社会経済的文脈のなかで「差異をつくりだす(他の場所との)結びつき」がいかに再分節化されるか[クリフォード 2002]をめぐる興味深い事例といえるだろう。

しかし、特定の差異、たとえば、「難民」であることへの着目が、彼ら彼女らの越境経験を「紛争ディアスポラ」として均質的なものと捉えてしまう可能性と隣り合わせであることはここに指摘するまでもない。これに関して、「インド IT ワーカー」や、湾岸諸国における「女性家事労働者」を論じる章では、そのカテゴリー内部の階層性や宗教による労働条件の差異などが指摘され、越境者の複数の属性の重なり合いを丹念に精査することの重要性が示唆されている。

* 京都女子大学 (文化人類学)

・ 2008、『越境の人類学—在日パキスタン人ムスリム移民の妻たち』、東京大学出版会。
・ 2011、「移民女性の働き方に見るジェンダーとエスニシティ—パキスタン系イギリス女性のコミュニティ・ワークを中心に」、竹沢尚一郎(編)『移民のヨーロッパ—国際比較の視点から』明石書店、172-197頁。

本書の特色の第二点目として、送り出し側からの視点に重点をおいていることがあり、そのアプローチがもたらす重要な成果として、ディアスポラと、移出民を取りこみつつ国境を再編しようとする送り出し国家とのあいだの複雑な関係性が浮かび上がっている。

まず、人々が国家に生活保障を期待するよりも、国外に家族を送り出し、その送金に依存するという「私的な発展戦略の国際化」に向かい始めていることがバングラデシュやパキスタンの例から明らかにされる。しかし、一方で、東南・南アジアの国家の多くが、移出民からの送金額や人的資本がもつ意味に目を向け、移出民をまきこむ国家形成に乗り出していることが、フィリピンやインド、ベトナムなどの事例から克明に描き出される。

インドの事例ではさらに、階層の高いインド系移民の移住先での存在感の増大と、本国の国際的な地位上昇が相乗的である点が指摘され、ディアスポラと国家の協働ともいえる状況が示される。また、同国からのそうした働きかけは実質的に、移住先で社会経済的な影響力をもつ移出民を対象にしたものであり、「誰を再国民化するのか」は送り出し国家によって選択的に行われている。

しかし、本書が示すように送り出し国家の側からの国境再編の動きに対し、移出民からの応答は一樣ではない。たとえば、ベトナム難民は、移住先米国で社会経済的に周縁的位置にありながらも、自らを包摂しようとする本国政府には反感をもち、そのいずれでもない固有のアイデンティティを構築しようとするのである。

第三点目として、以上のように、故国や故地からの視点に重点をおく一方で、本書は、受け入れ国の体制についても重要な示唆を与えている。とりわけ、ビルマ、インド、パキスタンからの移民を扱う章では、欧米諸国との対照のもとに、受け入れ国としての日本が照射されている。難民やITワーカー、資格外就労者としてこれらの越境者の立場は異なるものの、日本では市民権や家族呼び寄せ、言語等の点で、欧米に移動した人々と比べて制約が大きいことがほぼ共通して指摘されている。さらに、そうした受け入れ国における諸制約が、転地における共同性の再編過程に作用し、たとえば、ビルマ人としての日本での凝集力の高さや、故国での民族・言語・宗教などの差異を超えた在日「インド人」コミュニティの形成に結びついているという指摘は、ディアスポラ形成に関与する諸要因の絡まり合いを考えるうえで興味深い。

最後に、本書の特色の第四点として、ディアスポラ研究の今後の重要課題が示されている点を指摘したい。とくに次の3点を挙げることができる。

第一に、本書では、越境者がかかえる（移住先と故国の）二重性とどまらず、その先に連なる移動の継続性や反復性が照射されている。たとえば、アフガン難民の「帰還」は、一方向的なものではなく家族の段階的帰還をとおした多方向的なプロセスであり、そこから難民二世のアイデンティティ形成の複雑性が明らかにされる。また、日本から強制送還されたパキスタン人を本国や次の移住先で追跡調査した論考では、親族集団を資源として展開するグローバルな移動の連なりが示される。そこでは、移住者たちのしたたかな戦略の一方で、経済的合理性のみに回収されない、個とし

での欲望や計算外の矛盾した感情が描きこまれ、その記憶は次なる移動の経験とも絡み合っている。さらに、スリランカ人女性家事労働者を対象とした詳細な聞き取り結果を分析する最終章は、帰還後に貧困が緩和されていないことを明らかにしたあとで、「それでも女性たちは、なぜ海外出稼ぎを繰り返すのか」という問いの提起で閉じられる。これらの事例は、グローバル化が深化するなかで、人々の移動の軌跡やディアスポラの生成／再生産のプロセスがいつそう複雑化していることを示唆している。その一方で、国家は国境管理を厳格化し、多くの人々の流動性はまだまだ「容赦なく制限」されたままである〔ブルーベーカー 2009: 390-391〕。こうした状況において、さらなる移出を生み出す社会経済的諸条件と、移動をめぐる人々の夢や欲望との複雑な連関に目を向けることの必要性はいつそう高まっている。このことを、「日常生活の目線から見たディアスポラの社会学的調査を基盤」とした本書は説得的に示しているといえるだろう。

第二に、在日ビルマ人の事例では、国民国家形成の過程で排除されてきたイスラーム教徒のロヒンギャ民族が、在日ビルマ人コミュニティでも「同胞」とされず、政治運動に参加できていないという重要な指摘がなされる。国境間の移動をめぐる研究では、国民国家とディアスポラは対置されることが多かったのに対して、こうした事例はむしろ両者の社会編成の相同性を顕わにする。グローバル化の深化はこうした相同性を破り、ディアスポラ空間における新たな社会的連帯や「トランスナショナルな市民社会」〔ヨー 2007: 165-166〕をいかに切り拓くことができるだろうか。

第三に、フィリピン人ディアスポラをめぐる論考の最後では、フィリピン国内におけるミックスの子どもたちや国際結婚により多様に形成されるトランスナショナルな家族などの存在が指摘されている。ここに予見されているように、移出民をまきこむ国家形成という新たな段階での「国民」のカテゴリー化の流動と再編のなかで、これらの「複数の国家の間に生を受けた人々」を可視化し、彼ら彼女らと国家との関係や、そのエンパワメントが発動される過程に光を当てることが今後不可欠となるであろう。

以上述べてきたように、本書は東南・南アジア出身者の越境経験の多面性と複雑性を浮かび上がらせ、そこからディアスポラと国民国家の緊張関係が照射されている。このことをみれば、本書は、「東南・南アジアのディアスポラ」の特性を問うと同時に、豊かな事例の精査とその比較対照によって、「ディアスポラ」概念そのものを鍛えていくための洞察に富む糸口を提供しているように思われる。監修者や編者が述べるように、本書で「ディアスポラ」の用語がきわめて緩やかな定義のもとで用いられていることもその意味で戦略的と解釈できる。しかし、越境による社会再編プロセスを理解するための新たな地平を切り拓くためには、「ディアスポラ」の実体化を回避しつつ、一方で、「国民」に対置される「移民」といった既存概念との分節化にたえず意識的である必要はあるであろう。越境者が再創造／想像する社会空間についての示唆深い事例を提供する本書のような研究の蓄積をとおり、国家の境界の維持・再編をめぐる議論が深化するとともに、それによって「ディアスポラ」の概念がいつそう豊かなものとなることを期待したい。

参考文献

- クリフォード、ジェイムズ、2002、「ディアスポラ」『ルーツ—20世紀後期の旅と翻訳』、有元健ほか（訳）、月曜社、277-314頁。
- ブルーベイカー、ロジャーズ、2009、「『ディアスポラ』のディアスポラ」、赤尾光春（訳）、白杵陽（監修）『ディアスポラから世界を読む』、明石書店、375-400頁。
- ヨー・ブレンダ、2007、「女性化された移動と接続する場所—『家族』『国家』『市民社会』と交渉するトランスナショナルな移住女性」、伊豫谷登士翁（編）『移動から場所を問う—現代移民研究の課題』、有信堂、149-170頁。

石上悦朗・佐藤隆広 [編] 『現代インド・南アジア経済論（シリーズ・現代の世界経済6）』（京都：ミネルヴァ書房、2011年、414頁、3,500円＋税、ISBN978-4-623-05871-6）

（評）友澤 和夫*

現代インド・南アジア経済に関する待望のテキストが刊行された。本書はミネルヴァ書房『シリーズ・現代の世界経済』全9巻の第6巻に当たる。このシリーズは、グローバル化の進展によって変動する世界経済の体系的把握を目的に編まれたもので、2004年に同社より出版された現代世界経済叢書全8巻シリーズの後継と位置づけられる。ただし、同叢書においては第4巻『アジア経済論』があるものの、そこで言うアジアとは東アジアと東南アジアであり、残念なことにインド・南アジアは対象から外されていたのである。今回のシリーズでは、インド・南アジアが単独の巻とされた一方で、東アジア・東南アジアを扱った巻はない。この措置は、両シリーズ間で取り上げる地域のバランスをとったものとも言えるが、評者は現在の世界経済におけるインド・南アジア地域の重要性の高まりを反映したものと理解している。

もっとも、こうした世界シリーズ本によらずとも、インド経済については各時代の経済情勢やその変動を反映しながら、これまでに多くの優れた概説書が刊行されてきた。たとえば評者が大学院生であった1980年代後半には、その時期に導入された部分的自由化の影響を大きな論点として、『インドの工業化 岐路に立つハイコスト経済』（伊藤正二編、アジア経済研究所、1988）や『新版インド経済』（西口章雄・浜口恒夫、世界思想社、1990）が出版された。そうした本を、赤線を引いたり、メモを取ったりしながら繰り返し読んだことを今でも思い出す。本書も、インド・南アジア経済を志す若い世代にとっては、こうした必読の書となることが十分に予想される。

* 広島大学大学院文学研究科

1999、『工業空間の形成と構造』、大明堂。

2012、「インド自動車部品工業の成長と立地ダイナミズム」、『広島大学現代インド研究—空間と社会』、第2巻、17-33頁。